

日本音楽教育学会 ニュースレター 第13号

Japan Academic Society for Music Education: News Letter No.13 2003, 8/30

目 次

| | | |
|--------------------------------------|-------|----|
| 新しい時代に向けて - 日韓音楽教育姉妹学会協定締結報告 | 筒石 賢昭 | 2 |
| 【国際大会報告特集】 | | |
| SARS を越えて - 報告：第4回 APSMER 香港大会 | 村尾 忠廣 | 4 |
| 第4回アジア・太平洋音楽教育シンポジウムに参加して | 杉江 淑子 | 6 |
| 第2回ライアー国際大会に参加して | 島崎 篤子 | 7 |
| マレーシア音楽教育大会2003 報告 | 加藤富美子 | 8 |
| 第25回バリ・アート・フェスティバル2003年 | 降矢美彌子 | 10 |
| 【Letter to the Editor】 | | |
| 「和楽器」導入に関する雑感 | 安藤 政輝 | 12 |
| 音楽教員を支援する二つのポータルサイトの紹介 | 深見友紀子 | 13 |
| 「交流の場」の広がり | 鈴木慎一郎 | 14 |
| 音楽科教育について日頃、思うこと | 桂 博章 | 15 |
| 平成15年度第2回常任理事会報告 | | 16 |
| 住所・所属変更及び新入会員住所 | | 17 |
| 第34回全国大会《院生フォーラム》への誘い | 岡部 芳広 | 21 |
| 編集後記 | | 22 |

新しい時代に向けて - 日韓音楽教育姉妹学会協定締結報告

Academic Exchange Agreement between Korea Music Educators Society
and Japanese Music Education Society

筒石 賢昭



日韓姉妹学会交流協定に調印し、拍手を受ける村尾学会長と韓国音楽教育学会 Whang 学会長

21世紀に入り、日本音楽教育学会も国内のみならず国際的な場で翼を広げる時代が到来しています。昨年金城学院大学での総会で、日本音楽教育学会と韓国音楽教育学会は両学会の相互信頼を基盤として、音楽教育学会の発展のために、学会及び会員の交流を促進し、相互の利益と発展に貢献できるように姉妹学会協定の提案がされ承認されました。これを受けて、韓国音楽教育学会のホワン（Whang）会長と事務局長が来日され、本学会に参加されました。

今回韓国側から村尾忠廣会長と事務局長の筒石が8月7日、8日ソウル郊外、すばらしいセミナーハウスで行われた韓国音楽教育学会（正式名称 Korea Music Educators Society）の大会に招待され、そこで日韓音楽教育姉妹学会協定締結に調印しました。その状況を韓国の学会の概要等を含めながら報告します。

会場は1997年APシンポジウムの会場となったセミナーハウスと言っても緑に囲まれた4階建ての瀟洒な建物でITや宿泊施設も完備しているホテルのような会場である。二日間寝食を共にしながらの大会であった。

1. 姉妹学会締結（2003年8月7日）について

調印式は、7日の夕方韓国音楽教育学会の大会一日目のプログラムのフィナーレに参加者約250名が見守る中で行われた。用意された文書に両学会の会長がそれぞれ文書に署名をし、調印終了後文書を掲げ両会長は固い握手を交わした。両学会にとって歴史的なイベントであった。その後前韓国教育学会会長の司会で、韓国の教育的資源部（日本の文科省に相当）や第7次の音楽教育改革に携わった方からのスピーチ

があった。

2. 韓国音楽教育学会全国大会について

大会実行委員長のソク教授（2月に来日し、日本音楽教育学会の後援で韓国の音楽教育についての講演を東京学芸大学で行った。）によれば、韓国の学校は週6日制なので、現場の状況を考えるとやはり夏休みの時期が好都合だということであった。発表会場が一つの建物の中なので、移動も少なくスムーズに運営されていた。

殆どがハングルによるプレゼンテーションと配付資料のため理解できにくい部分もあったが、幸いスタッフの何人かはアメリカの大学院での筆者の同窓でもあり英語への通訳と、韓国在住の横浜国立大学修士課程出身のパクさんが献身的にアシスタントをしてくれたので、大変に助かった。

参加者は、現場（幼稚園、小学校、中学校）の教師の割合が高く、大学等の教育関係者、大学院生と続いた。日本の学会参加者と比較して、若い人の参加者が多いという印象であった。また日本よりも現職教員で大学院に行っている人が多く参加していた。

大会は、基調講演が2本、演奏会が3プログラム、研究発表が40本、ワークショップが8本、及び大学院生のポスターセッションが13本であった。

研究発表の領域は、幼児の音楽教育、教授学習過程の心理学的・教育学的研究（孔子、デューイ、ヴィゴツキー、ガードナー、概念的研究等）、新しい韓国の音楽教育課程、韓国伝統音楽のカリキュラム、日韓の教育体制の比較研究、音楽教育におけるコンピュータ及びマルチメディア関係、創造性や作曲のプログラム、教育評価、教師教

育、鑑賞の指導等であった。

ワークショップは韓国の伝統的歌唱法、オルフ、鑑賞教材の身体表現等であった。基調講演の一つは村尾会長の英語によるスピーチでタイトルは "Tsugaru" and "Okinawa" bouncing beat music as two bridges from Japan to Korea and the young to the old で津軽三味線の高橋竹山とアリランとの関わり、キムチという語から弾む拍と弾まない拍の興味深い分析、沖縄のエイサーと韓国のサムルノリのアンサンブルなど日韓両国の架け橋を音楽を通して年代を超えて行いたい旨のスピーチであった。村尾会長のパフォーマンスを交えながらのプレゼンテーションは参会者に大きな感銘を与えた。

演奏は、韓国の伝統音楽の演奏（小学生と成人グループ）、ソウルの中学生のリコーダーアンサンブルであった。いずれもすばらしいデモンストレーションと演奏であった。韓国の伝統音楽のプログラムの後、筒石が日本の尺八の本曲「木枯より」の演奏をした。ワークショップでは韓国の伝統的な歌唱の指導方法が特に印象に残った。

3. 今後の展望

福岡とソウルはわずか空路40分。名古屋からでも1時間30分の近さ（！）である。今回参加して韓国の音楽教育研究に対する熱き思いがひしひしと伝わってくる大会であったことが体感できた。韓国の方々も歓迎してくれて有意義な大会であった。今後もこれをスタートとしてお互いの大会で両国の研究者が自由闊達に意見交換ができることを推進していきたいものである。

（事務局長・東京学芸大学）

【国際会議報告】

SARS を越えて 報告：第4回 APSMER 香港大会

村尾 忠廣



K. Swanwich を囲んで記念撮影する日米中台湾の参会者。中央が K. Swanwich。右は中国音楽教育学会会長の Xie Jiaying。左が筆者、その左は昨年シドニーから香港に赴任した G. McPherson (ISME 次期会長)

【SARS を越えて開催された第4回 APSMER】

第4回アジア太平洋音楽教育シンポジウム (APSMER) は SARS 問題が勃発してほとんど開催不能ではないか、と思われていた。しかし、香港の大会実行委員会は、4月、5月になっても大会の中止も、延期もしない。それどころか、ただひたすら開催の方向で参会者への説得を続けていた。私たちの感覚からすれば、それはほとんど非常識に近く、腹立たしい思いをした人も少なくなかったようである。おそらく Jane を初めとして実行委員会のメンバーは大会開催までに SARS 問題が収束 - 終息すると信じていたのだろう。いや、そう願って祈っていたのかもしれない。その願いはまもなく現実になった。6月になると WHO が香港への渡航自粛勧告を解除、そして感染地域も解除、SARS は APSMER の大会 1 月前に完全に終焉したのである。第4回アジア太平洋音楽教育シンポジウム

は、こうして予定通り香港で開幕となった。

【大会テーマ：音楽科のカリキュラム改革】

大会は今世界各国で急速に進んでいる音楽科のカリキュラム改革をテーマに掲げた。したがって、発表も各国のカリキュラム改革の現状を報告したものが多くなった。リサーチのシンポジウムという点からは少々疑問なしとは言えないが、台湾や中国、韓国で今進行していることを相互に関連づけて聴くことができる。共通しているのは芸術、教科の総合的教育という方向である。北京からは大学院の学生が大勢発表した。それらは個人の研究というより教育省で進められているカリキュラム改革の報告というべきであろう。英語もたどたどしい。それでも、初めて国際舞台で発表するという熱気のようなものが感じられる。私は、これらの北京の大学院生を含め、台湾、香港、韓国の学生たちとも親しくなった。一緒に

アジアで大人気の長渕の「乾杯」を歌って楽しかったのだが、何だかおかしい。どうしてここに日本の大学院生が一人もいないのだろう。十名ほどの発表予定者がいたはずなのに、ここには全員きていないのである。SARS問題は完全に解決していたのだから、もう少し自主的な判断というものがあってよい。日本の院生が来ていれば、ここで即席のアジア地域「院生フォーラム」ができていたかもしれないのである。実に残念なことであった。

【基調講演】

基調講演は、Gary McPherson（オーストラリア - 香港）、Lucy Green（英国）、Xie Jiaying（北京）、Peter Webster（米国）の4名。Garyの講演は、J. Davidsonとの共同研究に端を発した一連の学習方法に関する継時的研究である。昨年シドニーで開催された第6回国際音楽知覚認知学会（ISMPC）でも同様の基調講演をしているから、発表がすっかりうまくなってきている。私は発表内容よりも、あの発表のしかたをそっくりコピーしたいものだ、変なところに感心した。ロンドン大学のLucy Greenは、ポピュラーミュージシャンがどのように音楽を学んでいるか、ということを中心に発表した。発表内容自体はそう目新しくはなかったが、ポピュラーミュージシャンの音楽の学び方の実態を研究としてまとめあげるプロセスが面白い。発表を聴きながら彼女の繰り返す「copying」という言葉に、日本語の真似る、とか聞き覚え、という訳語でない概念を感じて、いつの間にか「copyingの意味について」と題する論文を書かなくてはと思い始めていた。北京のXie Jiayingについては、発表内容よりも彼の性格のことを書きたい。数少ない英語が話せる教授と

いうこともあるが、実にopen mindである。私がISMEの2006年北京大会に向けて関わってきた人は残念ながらそうではなかった。ISME北京大会はほとんど決まっていたのに、最後の契約の段階で「ドタキャン」されてしまった。（私が昨年手術入院してしまい、決めに欠いていたせいでもあるのだが・・・。）その直後であっただけにXie Jiayingの国際的感覚にはほっとした。中国音楽教育学会の会長でもあり、今後は彼が日中韓の音楽教育研究の窓口になってゆくことだろう。

【次回2005年大会は米国シアトルに決定】

次回2005年大会はM. Hariharanの主催によるインドのはずであった。しかし、その後アメリカ、ワシントン大学（シアトル）のS. Morrisonから次回大会の立候補があり、投票の結果、シアトルに決定した。アメリカというと変に思えるが、Morrisonは香港にいて、それからシアトルに移った人でありAPSMERの常連である。シアトルでアジアからの留学生を迎え、アジア太平洋の懸け橋となっている。アジアの民族音楽に造詣の深いP. Campbellもワシントン大学であり、Morrisonと共に実行委員となる。そう考えれば適地と言ってよいだろう。張り切っていたHariharanには気の毒なことをしたが、敗因は香港グループとの関係をこじらせてしまったことにある。慰めの言葉に代えて、うっかり来年は私がインドを訪れることを約束した。2007年大会はインドで開催できるのか、はやくも2007年開催地の立候補の声が聞こえてくる。APSMERの創設者としては子どもの成長をみる思いである。

（会長・愛知教育大学）

第4回アジア・太平洋音楽教育シンポジウムに参加して

杉江 淑子

第4回アジア・太平洋音楽教育シンポジウム（4th APSMER）は、予定通り7月10日から12日に香港で開催された。「予定通り」と記したのは、かのSARS騒動のなか、開催はとても無理なのではないかと、筆者自身、5月末頃まで感じていたからである。実際にわが勤務先からも、WHOの渡航自粛勧告が解除されるまでは、該当地域への渡航を自粛すること、帰国後10日間は人とできるだけ接触しないことという警告が出されていた。感染の危険云々よりも、帰国後10日間の自宅謹慎（？）というのが、7月末まで講義を予定している身としては困るなというのが正直なところであった。それゆえ、渡航自粛勧告の解除、その後の感染地域指定からの解除のニュースは本当に嬉しく感じた。

こうして迷った末の参加であったから、なおさら、香港教育大学の受付にてシンポジウムの実行スタッフに出会ったとき、気配りの届いた仕事をテキパキこなす補助役の学生たちを目にしたとき、そして練習を積んだことであろう学生たちのパフォーマンスを鑑賞したときには、香港まで来てよかったとつくづく思うこととなった。

シンポジウムのプログラムは、Gary McPherson, Xie Jiaying, Lucy Green, Peter Websterの錚々たる4人の研究者の基調講演の他、81本の研究発表、4つのワークショップ、ポスター発表1、そしてプリナリーセッションと豊富であった。

日本からの発表本数は17本。そのうち現地での発表は5本（6名）で、現地参加できなかった他の発表者は大スクリーンを用いたVTRによる発表とポスター発表であったが、このような形態が可能となったのも、充実した設備を備える香港教育大学なればこそであったといえよう。

「音楽のカリキュラム改革」というシンポジウムのテーマにもよるのであろうが、今回の発表の中で目立ったトピックは、それぞれの国・地域の音楽カリキュラムの現状分析、香港・台湾・中国本土等の学校教育における伝統的な音楽文化の取扱いなどに関する報告であった。また、日本も同様であるが、東アジアの国々・地域ではどこも、近年、創造的な音楽づくりを学校の音楽教育に積極的に導入することへの関心が高まっているようであり、カリキュラム改革との関連から、そのことを論じた発表も幾つか見受けられた。

リサーチ・テーマを絞り込んで論及するというスタイルの「研究」発表というよりは、各国・地域の現状報告と紹介という趣の発表が比較的多いように感じたが、それはそれで、他の国・地域の現状について正確かつ多角的な情報を得るという意味において有益なことであり、このような国際大会ならではのことであろう。

その他、筆者の関心領域に関わる研究面での収穫として、聴取による音楽の習得方法の有効性を確認できる幾つかの研究報告

に出会うことができたことを挙げておきたい。Lucy Green によるポピュラーミュージシャンの音楽習得過程に関する研究、Bo Wah Leung による音楽のクラス指導のケース・スタディにおける "Sound before Notation"、Hiromichi Mito による聴取による歌の記憶・再現に関する研究

等々、それぞれが独立した研究であるにもかかわらず、そこに何か一本のつながりを見出した気がして、いま少し心が弾んでいる。

(滋賀大学)

第2回ライアー国際大会に参加して

島崎 篤子

2003年7月20日から25日の6日間、アメリカ北東部の町キーン(Keene)のMonadnock Waldorf Schoolで第2回ライアー国際大会が開催された。イラク戦争の影響もあり一時アメリカでの開催が危ぶまれた。2000年の第1回ライアー国際大会(20ヶ国約300人の参加)ほどの盛り上がりには欠けたが、アメリカ、ドイツ、日本など15カ国122名の参加者が集い、意見交換や演奏を核にした充実した大会が行われた。13名の日本人参加者に欧米在住の7名の参加者を加えると、日本人は全体の16パーセントを占めていた。

この第2回ライアー国際大会のテーマは、"Building Community Through Music"である。朝の8時半からの全体による基本練習や短い即興演奏の後、ティー・タイムを挟んで各自が希望した講師のライアー・グループで演奏を行う。昼食後は小イベントやコンサートのための合同練習と複数用意された小グループによる"Community Building Workshops"(共同体づくりのためのワークショップ)に参加する。そして

夕食後は講演または講師陣や参加者によるコンサートが夜9時まで続くというハード・スケジュールだった。

私はドイツで師事しているS.ハインツのライアー演奏グループに入り、かつカリフォルニアのRudolf Steiner Collegeのライアー教師で音楽療法士のA.プロントによる音楽療法のワークショップに参加した。大会最終日の夜には、キーン市内のコロニアル・ホールにおいて日本人グループによる演奏の他に、約30名の国際的・グループに加わり、シュタイナー学校の子供たちの合唱と共に、C. A. リンデンベルク作曲の大会記念楽曲「FROM PSALM 104」を演奏する機会にも恵まれた。

ライアー(Leier)は、一般的に「豎琴」を意味するドイツ語だが、ここでいうライアーは、今から77年前の1926年にR.シュタイナーの思想に影響を受けた音楽家E.プラハトと彫刻家のR.ゲルトナーの努力の結晶として誕生した新しい楽器である。主にシュタイナー教育や人智学系の音楽療

法で活躍している楽器なのだ。しかし最近
は宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』のエン
ディング・テーマ「いつも何度でも」（木
村弓作曲）に使われている楽器といえば、
大概の人は了解してくれる。この映画がヒッ
トし、かつ金熊賞やアカデミー賞（長編ア
ニメーション部門）を受賞したことも手伝
って、日本ではライアーという地味な楽器の
知名度は高まった。今回の大会においても
ドイツのライアー製作者の講演の中で、微
妙なニュアンスで日本からの多くの照会に
ライアー製作者たちが困惑している旨の話題
が出された。この講演直後、日本人メン
バーから日本の状況が話題になっているに
も拘わらず日本語の通訳を立てないのは問題
だとの厳しい指摘があった。この時点まで
英語とドイツ語が正面で同時通訳されて
いたが、日本人は海外居住者による通訳を
囲んで密やかに情報を確かめ合っていた。
急遽、この問題に関する臨時討議の時間が
翌朝の全体会に設定された。日本側からは、

泉本信子、吉良創の両氏が、映画の影響を
受けて以来、ライアーがその本来の姿から
切り離されて一時的な興味の対象になって
いる状況やライアー指導者が不足している
日本の現状などについて説明した。大会参
加者の共通課題として、ライアーの未来に
関する国際大会にふさわしい白熱した議論
が交わされた。これを契機に、堂々と立ち
上がって日本語の通訳が行われるようにな
った。まさに国際大会の在り方を考えさせら
れる一幕だった。

現在、ライアーは多様な場面で使われ始
めている。ヒーリング・ミュージックの名
の下に得体の知れない活動も見受けられる。
この大会で話題になったように、ライアー
は守るべき楽器なのか楽器自体がもつ精神
性を見守るべきなのかは歴史が教えてくれ
るだろう。ライアー奏者の一人として、神
秘的な響きに浸りながらその推移を静観し
たい。

（岩手大学）

マレーシア音楽教育大会 2003 報告

Malaysian Music Education Conference : Mus 2003

加藤富美子



マレーシア音楽教育大会 2003 会場



ロビーでの歓迎

「マレーシア音楽教育大会 2003」
(2003年8月4日~6日:シャーアラム,
ホテルコンコルド)に研究発表者として参
加した。この大会は、マレーシアで音楽教
育講座をもつ6つの国立大学とマレーシア
教育省が協力して開催されるようになった
音楽教育の国内大会で、2002年に第
1回大会が開かれ今年が2回目にあた
る。今年度の大会テーマは"Charting
Directions For Music Education"
(音楽教育の方向を指し示そう)で、マレー
シアの音楽教育関係者約250名を集めて
開催された。

開催地シャーアラム Shah Alam は今
回の担当大学 Universiti Teknologi
MALA の所在地で、クアラルンプールから
車で40分ほどの距離にあり、多民族国
家マレーシアのプミプトラ政策(マレー人
など先住民優遇政策)の結果、マレー系マ
レー人の理想の町として作られた新興都市
である。マレーシアの現在の国情を反映し
ているようなこの地で開催されたことは、
今まさに始まったばかりのマレーシアの音
楽教育の方向を探るといふ大会テーマとも
符号し象徴的であった。

国内大会にも関わらず、大会運営全体に
わたって国際学会の年次大会の印象を受け
た。その大きな理由は、第2回大会にして、
基調講演をはじめ4名の海外からの講演者
(アメリカ、タイ、日本、フィリピン)を
招聘し、海外からの研究発表者も公募する
という画期的な企てによるものだろう。こ
れを提唱したのは、2002年の日本音楽教
育学会大会のプロジェクト研究「アジア諸
国の音楽教育制度に関する研究」の発表者
として来日した Universiti Putra の
Dr. Chan Cheong Jan 氏である。この
プロジェクト研究においてタイ、台湾、ベ

トナム等のアジア諸国の音楽教育研究者と
の情報交換の大切さを認識したことがき
っかけとなって、マレーシアの音楽教育の構
築にあたってアジア諸国との交流が欠かせ
ないと提唱した。基調講演では、アメリカ
の Harry Price 氏が基礎研究に基づいた教
育実践の在り方の重要性を示した。講演で
は、タイの Nurtt Suttachitt 氏による
氏自身による多彩な演唱を伴ったタイの音
楽教育の歴史と現在、フィリピンの
Francisco A. Engel 氏によるアジア各
地の詳細なフィールドワークに基づいた非
西洋音楽と西洋音楽が融合した新しい音楽
様式と音楽教育の関連について、それに日
本からは田中健次氏による日本の音楽教育
における音楽テクノロジーの応用の可能性
と課題が報告され、それぞれについて会場
の大きな反響を呼んだ。

マレーシアの音楽教育が抱える一番の問
題は、多元文化主義、多民族国家であるが
ゆえの、マレーシア人としてのアイデンティ
ティの確立の難しさである。海外からの講
演や研究発表のすべてにわたって、会場か
らは「私たちの国の状況に置き換えた時
にはどうしたらいいのか?」という質問が鋭
く飛んでいた。今、急速な勢いで発展し続
けている国マレーシアの音楽教育関係者た
ちの意識の高さと真摯にものごとを希求す
る態度に強く打たれた大会であった。

なお、今大会の会期中に2006年の
ISME 開催地としての打診があり、ほぼ決
定したと聞いている。今大会の主催、運営
すべてを行っていたのは若い研究者たちで
あった。ISME 開催に向けて、この若い力
がまたどこまで成長し発展していくのか、
大きな期待が寄せられる。

(東京学芸大学)

第 25 回バリ・アート・フェスティバル 2003 年

バリ島のガムラン古楽器の復興にかける友情の掛け橋

降矢美彌子

近年、日本では、インドネシア・バリ島のガムランやバリ舞踊が静かなブームになっている。宮城県でも宮城教育大学附属中学校などでガムランが取り上げられきている。さて、一口にガムランといっても様々な種類がある。ガムラン・ゴン・クビヤールは青銅のオーケストラと呼ばれる、ガムランの中でも最も壮大なガムランで、バリ島シンガラジャ県が発祥の地と称される。かつてはこのシンガラジャ県に属していた（現在はタバナン県）バンティラン村の由緒あるガムラン楽器が、宗教儀式には用いられていたものの、長い間放置され、木枠などぼろぼろになっていた。村には長いこと踊り子さえもいなかったという。

バリ在住のバリ舞踊家俣野葉月さんが、バンティラン村のこのガムラン楽器の復興計画を聞き、村の僧侶でバリ舞踊の名手イ・マデ・ジェラダさんや村人達と〈バンティラン村のガムラン・ゴン・クビヤール復興とバリ・アート・フェスティバル参加プロジェクト〉を立ち上げ、この6月公演を行った。プロジェクトは、日本人のバリ舞踊家が、朽ち果ててしまった村の由緒ある楽器の復興に協力し、バンティラン村の村人達の演奏する復興したガムラン楽器の伴奏で、村人に楽器のお披露目公演を行い、同じプログラムで第25回バリ・アート・フェスティバルに参加するというものであった。

俣野さんは、東京芸術大学大学院彫刻科を卒業したバリ舞踊家で、在学中インドネシア芸術大学の舞踊科に学び、東京でバリ舞踊を教えていた。俣野さんは、ジェラダ

さんの弟子や、彼が日本公演で踊った際一緒にステージを務めた日本のバリ舞踊家に声をかけ、楽器の修復のカンパを募った。プロジェクトに参加した日本人踊り子は18名であった。都合のつく日本人の踊り子達は公演1ヶ月前にはバリ島に集まり、ジェラダさんからレッスンを受け、バンティラン村の人達が演奏する復興したガムラン楽器と合わせの練習を行った。6月19日、バンティラン村で楽器お披露目公演を行い、2日後の21日、同じプログラムで第25回バリ・アート・フェスティバルに参加したのである。

インドネシア・バリ島の州都デンパサールでは、6月14日から7月13日まで、アート・センターにおいて、第25回バリ・アート・フェスティバルが行なわれた。バリ島のアート・フェスティバルは、いかにもバリらしい音楽フェスティバルである。期間が1ヶ月と長く、非常にたくさんの演目が演じられる。今年は、130の演目が演じられた。アート・フェスティバルには、バリの各地から名人達が集まり、競うように多様な古典芸能を熱烈に奏で踊る。バリは交通網が完備していない。だから、バリの芸能を愛好するものにとって、デンパサールにいながらにして、バリの芸能を全貌でできるアート・フェスティバルめったにない有り難い催しなのである。

バリの人たちは、伝統を重んじているように見えて、実は大変新らし物好きで、フェスティバルでは斬新な前衛的な試みも行なわれる。外国人の参加もある。子ども達のわらべうたによる寸劇といった演目やまさ

に楽しみとしての娯楽的な演目もある。オーソドックスな演奏会場といった趣のホールから、大きなコロシウムのような野外劇場、小さな野外ホールまでいくつものホールを使って、午前から夜まで同時に多様な演目が上演されるのである。バリ・アート・フェスティバルは、屋台や夜店が溢れるように軒をつらね、庶民から専門家、子どもから大人が心からバリの芸能を楽しむ巨大なお祭りなのである。

バンティラン村はデンパサールからおおよそ数十キロ北西にある。村のガムランとの合同練習には、踊り子達が車を連ねて山道を3時間近くかけて通う。電灯の少ない村の夜空に輝く星の美しさは息を呑むようであった。6月19日、村のお披露目公演では、復興したガムラン・ゴン・クビヤールの燦し銀のようにならずしとりとした、華やいだ音が夜空いっぱい響きわたった。

最初に1918年にバンティラン村で奏されていたという古曲<タブ・トウア・バンティラン>(バンティランの古曲の意)の音が夜空に響いた。村の長老によって奏されたトロンボンという楽器のソロのひなびた音色が響いたとき、村人達から驚愕の笑いが起きた。それはあの長老がトロンボンを奏することができようとは思ってもみなかったという、あまりにも驚愕した、賞賛の、親愛の笑いであった。その位長い間、バンティラン村ではトロンボンが奏されていなかったのだ。演奏の最後には、深い感慨がしじまのように拡がり、拍手が鳴りやまなかった。村人達も必死になって公演に備えて練習したのであった。

葉月さんの呼びかけに応じた日本の踊り子達の中は、デンパサールにあるインドネシア芸術大学に留学してバリ舞踊を専門に

学び、バリ舞踊の教師を務めている専門家から、バリの人々の叩くガムランに合わせて踊るのは今回が初めてという人まで、その経験は様々であったが、全員が大きな喜びの気持ちに溢れ、頬を高潮させて踊ったのである。当夜の演目は9演目、3時間近くかかる膨大なものだった。

葉月さんは、創作でレゴン・クラトンの踊りの振り付けをジェラダさんの助力を得て行い、4人の日本人踊り子と仮面を付けて踊った。宮城教育大学でバリ舞踊の卒業研究を行い、後にインドネシア芸術大学に留学してバリ舞踊を学び、現在は、仙台でバリ舞踊を教えている守屋圭子さんは、本来は男性が踊ることの多い<タリ・パラウキヤ>という踊りを踊った。曲中、トロンボンを奏で、バリの古語の歌詞による歌も歌う難曲である。先生方が、圭子の踊りにはバリ舞踊で最も大切な、祈りの心があると評価されたのは嬉しいことだった。

2日後にデンパサールで行なわれたアート・フェスティバルでの公演は、満員の聴衆で溢れた。由緒あるバンティラン村の楽器の復興した音を聞かねばという理由で訪れる人も多かったと言う。国際交流が叫ばれて久しい。異文化間の音楽交流は必ずしも容易くない。

<バンティラン村のガムラン・ゴン・クビヤール復興とバリ・アート・フェスティバル参加プロジェクト>がどのように発展していくかについては、葉月さんの今後の仕事を待つ必要があるが、バリと日本の40年を超える音楽交流に、実質的な友情の掛け橋をかけ、音楽交流の新しい扉を開いたことは意義深い。

(宮城教育大学)

「和楽器」導入に関する雑感

安藤 政輝

新指導要領が実施されて1年余が過ぎました。「和楽器」の中で最も多く用いられている箏の導入にあたっての雑感を述べさせていただきます。

1. 「箏」 13絃で可動の柱(じ)を使う「箏」と、7絃で柱のない「琴」とは異なる楽器です。また「箏」は「そう」ではなく「こと」と呼びます。ただし「箏曲」(箏を中心楽器とした音楽)は「そうきょく」となります。

2. 楽器の種類 「教育用楽器」と称して寸の短い楽器が販売されています。寸の短い楽器は音量・音色・音域いずれの点においても標準寸法の楽器には及ばず、また「押し手」「ヒキイロ」等の左手奏法を行う上でも難点があります。

楽器は音が命です。子どもたちは敏感で正直です。それに応えるためには標準寸法の楽器が必要です。後々のメンテナンスの事も考えると、「セット」ではなく必要な物だけを和楽器専門店から購入したほうがよいでしょう。

3. 楽器の数 1人の教師が扱う数は、2～3人に1面で最大15面、できれば10面以内が望ましいでしょう。面数が多くなると、生徒の弾き方や調絃の狂いを直したりするのが追いつかなくなるからです。

また、1面の楽器を2～4人で同時に弾く例を見かけることがあります。左側に座って左手パートのピチカートまでは認めたとしても、反対側や右横に座ったり、押し手を別の人が行ったりすることは避けたいものです。短い時間でも1人ずつ交替して、「弾いた」という実感を体験させる事が大切です。

4. 爪 爪は右手の親指、人さし指、中指

の3本にはめます。爪の数が足りないから、あるいは弾きにくいからという理由で親指1本にしかはめないようなことは避けるべきです。爪の輪は指に合わせて作ります。共用する場合は輪の大きさを選ぶ作業にも時間が必要です。楽器の数を減らしてでも爪の数は生徒数以上を確保したいものです。

5. 奏法 「薬指・中指・人さし指の3本をそろえて糸の上に置き、親指の爪は弾いた後次の糸の上に当たって止まる」という親指の基本奏法をしっかりと教える事が大切です。爪を跳ね上げる弾き方では本当の音は出ません。

6. 教材 箏のために作られた曲、箏で弾くことによって音楽性がさらに高められる曲が教材として望ましいと思われれます。箏の伝統的な調絃は5音音階によっていますが、「押し手」を用いるか、あるいは初めから7音音階に調絃すれば、教科書に出てくるほとんどの曲を箏で弾くことはできます。しかし、パッパやアニメを箏で弾いたとしても、「箏という楽器」で音を出したというだけで「箏の音楽」を弾いたことにはなりません。さくらが多く使用されていますが、導入にあたっては最適な曲でしょう。

以上、述べてきた根本にあるものは、「本物を子どもたちに」伝えたいということです。「和楽器」の導入が単に「和楽器」に触るだけというのではなく、「和楽器」を通じて日本の伝統文化の存在と良さを再認識し、さらに確立した自己をもって国際化へ臨むという大きな流れの出発点に当たるということを認識した上で、子どもたちに接することが大切だと思ふのです。

(東京芸術大学)

音楽教員を支援する二つのポータルサイトの紹介

深見友紀子

平成 15 年 3 月末現在の公立学校におけるコンピュータの設置状況やインターネット接続状況、教員のコンピュータ活用の実態が文部科学省のホームページ上で発表されました。

この調査によると、動画像のスムーズな送受信が可能となる速度（401kbps）以上のインターネット接続回線をもつ学校の割合は、小学校で 52.8%（前年度末 35.8%）、中学校で 57.9%（同 40.2%）、高等学校で 75.7%（同 45.4%）で、この 1 年間で急速に増えました。また、コンピュータを操作できる教員の割合も小学校で 88.0%、中学校で 87.1%、高等学校で 89.0% とほぼ 90% に近い数字になっています。

ところが、コンピュータで指導のできる教員の割合になると、小学校で 66.3%、中学校で 46.1%、高等学校で 38.1% にとどまり、中学校、高等学校音楽専科教員は 34.1%、24.5% でそれぞれ校種全体の平均をかなり下回っています。また、インターネットに接続されている音楽室の割合も、小学校、中学校、高校それぞれが 4.3%、3.9%、5.8% で 1 割にも満たず、1 年前の調査の時と同様、図工 / 技術 / 美術 / 書道室、家庭科室などと並んで低水準です。

こうした音楽科の状況は、以前から指摘されてきましたので、音楽の先生を支援することによって、コンピュータ・ネットワークを少しでも多く授業などで有効に活用してもらおうと、信州大学の齊藤忠彦さんは「音楽教育ネット」

（<http://music.shinshu-u.ac.jp/music/>）

を、私は「音楽教育ドットコム」

（<http://www.ongakukyouiku.com/>）

を相次いで開設しました。

齊藤さんの「音楽教育ネット」には、音楽教育に関するホームページの紹介や学校紹介、授業紹介（PDF ファイルの指導案

や授業映像）、指揮法や各楽器の奏法に関する音声や映像、遠隔授業交流を希望する学校の情報提供などのメニューがあります。

私の「音楽教育ドットコム」は、掲示板、サイトナビ、リンク、コラムなどからなっています。中心的なメニューであるリンクには、富山大学の学生たちの協力を得て抽出した良質の音楽関連サイトが解説付きで載っています。音空間地図づくりで注目されている小林田鶴子さん（アコール音楽教育研究所）にもこのサイトの運営を手伝っていただいています。

「音楽教育ネット」は、音楽の教員が情報を提供しあうことを目指して、メニューを更新中です。「音楽教育ドットコム」も近々リニューアルを予定していますが、音楽室がブロードバンドにつながる近未来を想定して、当面は上記の音楽関連サイトを使用した指導案を募り、アップロードしていきたいと思っています。（日本の音楽・世界の音楽に関係するサイトを使った指導案を募集中です。）

コンピュータといえばまだワープロとメールのみという方がいたら、ぜひインターネットに溢れる音楽教育のための豊富なコンテンツ（=教材）を体験してみてください。

現状のままでは、「すべての学級のあらゆる授業において教員及び生徒がコンピュータを活用した学習活動が可能となるよう、概ねすべての公立学校教員がコンピュータを活用して指導できるようにする」という平成 17 年度末に向けた文部科学省の計画、すなわち『教育の情報化』の波に音楽科は乗り遅れるのではないかと思うからです。

サイトに関するお問い合わせは、saitota@gipwc.shinshu-u.ac.jp
office@ongakukyouiku.com まで。

（富山大学）

「交流の場」の広がり

鈴木慎一朗

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）に入学してから約5ヶ月が経とうとしています。「兵庫教育大学なのにどうして岡山大学にいるの？」とよく質問を受けます。その理由は、兵庫教育大学、上越教育大学、岡山大学、鳴門教育大学の4大学で構成された連合大学院のため、主指導教官の所属する大学へ配属されるというシステムだからです。

きびだんごや桃太郎で有名な岡山。まだ5ヶ月しかいないのに岡山の生活にも慣れ、長年住んでいたような錯覚にさえ陥ります。「住めば都」と言われますように、これも何かの縁だと思えます。

実は、今年のちょうど今頃開催された「くらしきゼミナール」に参加するため、岡山の地を訪れました。とは言っても、当時小学校の教諭を愛知県でしていたため、参加できたのは1日だけでした。しかし、自分の進路の上できっかけとなる意味深いゼミナールとなりました。

振り返りますと、小学校の教諭になった初年度に「日本音楽教育学会」に入会しました。実際に小学校で仕事をしていますと、なかなか自分の時間が持てず、音楽や音楽教育などについて学ぶことに制限がありました。そのような状況ではありましたが、年1回の全国大会や地区例会等に、都合のつく限り参加して、見聞を広げることができました。学会は私にとってリフレッシュの場でもあったのです。

大会発表等では、授業研究を始め実践的な内容のものが扱われるようになってき

ています。しかしながら、まだまだ現場の教員にとって「日本音楽教育学会」は敷居が高いようです。そういったことを解消するためにも、新しい学会誌『音楽教育実践ジャーナル』への期待は大きいです。

その他、今後の学会に期待することとして、「交流の場」であることが挙げられます。私は今、「音楽教員養成史」を研究課題として取り組んでいます。文献資料というのはもちろん貴重ですが、それを裏付けたり、補ったり、深めたりするためには、実際に人と会って情報を入手する大切さをつくづく感じます。戦争の風化の問題がささやかれているのと同様、師範学校や東京音楽学校等の戦前の音楽教員養成機関に携わった関係者は年々減り、資料等が整理されないまま、忘れ去られている傾向があります。つい数十年前までならだれにでも周知で当然だったことも、時代とともにそうではなくなってきました。

そこで、学会を通して多様な世代の方と交流を深め、その実態のお話を伺えたらと、願っています。おかげさまで「院生フォーラム」等を設けていただき、同世代の交流の場が浸透しつつあります。さらに、異なった多様な世代、多様な立場、多様な考え方、多様な音楽等を包み込むようなやわらかい「交流の場」が広がっていくことを期待します。

最後に余談となりますが、私は学部、修士、博士とそれぞれ大学を変えています。岡山大学へ来て一番驚かされたことは、指導教官が早朝から深夜まで研究室にこもっ

て仕事をこなしていることです。この文章を書いているのは8月のお盆の真っ只中ですが、先生の生活スタイルは変わっていません。大学の先生は優雅な職業というイメージが崩れました。しかし、とても生き生きしていらっしゃる先生の原動力はどこにあるのかと興味もあります。健康であってこ

そ、初めて研究が成立します。「酒は百薬の長」と言われますように、お酒を交えながら、音楽と健康について語ってみるのもおもしろいかもかもしれません。

(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科
博士課程在学中)

音楽科教育について日頃、思うこと

桂 博章

「音楽の素晴らしさや曲の価値を子ども達に伝える」という考え方は、音楽科教育の重要な目標のひとつとして広く受け入れられている。確かに高い芸術性をもった音楽作品と凡庸な作品の区別はあるが、音楽を専門や趣味としない人が、現代音楽の優れた作品を理解出来なくても差支えなく、このことは美術の領域に広げて考えれば、容易に納得がいく。私達の多くは、ずば抜けた才能をもった画家によって描かれた芸術性の高い抽象画と、才能のない画家によって描かれた抽象画を区別出来ないし、芸術的価値を理解する必要性も感じない。

一方、「達磨さん 達磨さん……」という睨めっこの歌は、音楽としては単純であり、高い価値をもたないが、母親と一緒にこの歌を歌った幼児は、情緒的にも社会的にも円満な発達を遂げる可能性は高い。つまり、音楽的価値と教育的価値は別であり、音楽作品を対象化し、その中に価値を閉じ込めることは、義務教育には馴染まないということである。

「自由に感じ、自らの意志で自由に行動

する子どもを育てる」という考え方も、教育界においては広く受け入れられているが、たとえば、人がある職業を選択することは、感じ方や考え方が制限されるということでもある。私達がもし農業や漁業を選択していたならば、今の自分とは随分、違った人間になっていた筈であり、私達の精神は教師という職業により制約を受けているのである。しかし、心身が拘束されることを嫌ってどの職業にも就かなければ、結局は虚しい人生を送ることになり、このことは帰属する国、(音楽)文化についても言える。「世代間も含め、地域、日本に共通する歌を身につける」ということは、学校で学ぶ音楽のレパートリーが制限されることではあるが、人は共有するものがないければ「公」に対する意識は生まれず、社会的に生きることも出来ない。「日本人だから日本音楽を教える」とよく言われるが、「日本人にするために日本音楽を教える」と言う方が適切ではないだろうか。

(秋田大学)

平成 15 年度第 2 回常任理事会報告

日時：平成 15 年 7 月 20 日（日）13:00 17:00

場所：東京学芸大学

出席：村尾・坪能・平井・筒石・奥・加藤・北山・重島・杉江・藤沢・丸山

欠席：島崎

【報告事項】

1. 事務局員の交代について

- ・現事務局員退職の為、新たに事務局員（1名）滝浦典子を採用、承認した。
- ・10月までは2人体制で順次引継ぎを行い、その後交代とする。

2. 後援名義について

- ・2003年8月6日に行われる「全日本電子楽器教育研究会シンポジウム」に後援名義使用願を許可し、承認した。

【協議事項】

1. 音楽教育実践ジャーナルについて（坪能副会長）

- ・特集のタイトルは「ボディーパーカッション」に決定。（現在6~7つの原稿を依頼中）
- ・編集委員担当者は一人だが、創刊号、2号についてのみ二人とする。
- ・全体編集はプロに依頼、印刷費込みで約50万円を予定。
- ・創刊号の原稿締め切りは7月30日。
- ・一般投稿についても5~10ページを予定。

2. 第34回大会について

- 1) 大会研究発表プログラム（会場）案、及び日程案が出された。
 - ・個人研究発表64本、ラウンドテーブル2本（2枠づつ使用）計66本（使用機器を考慮して）の各教室への振り分け。
 - ・司会候補者を検討し、依頼する。
- 2) 基調講演及びシンポジウム

基調講演・テーマ：「国際社会の音楽教育」

講師：新野幸三郎（神戸市都市問題研究所所長）

シンポジウム・パネリスト：

- 久万田 晋（沖縄芸術大学）
- ジェラルド・グローマー（山梨大学）
- 降矢美彌子（宮城教育大学）
- 司会 加藤富美子（東京学芸大学）
- 企画 奥 忍（岡山大学）

3) 日程の調整

3. 総会議題

- ・第34回総会議題が検討された。詳細はプログラムを参照

4. 韓国音楽教育学会との姉妹学会締結について

- ・会長、事務局長が学会に参加し締結する。今後、論文の交流も行う予定

5. 新入会員及び退会者の承認

- ・下記の正会員32名と特別会員1名、申し出退会者5名を承認

正会員

- | | | |
|------|-------|-----------------------------|
| 3101 | 齋藤 香代 | 弘前大学院生 |
| 3102 | 伯田 桂子 | 弘前大学院生 |
| 3103 | 井上 和夫 | Rangsit University |
| 3104 | 羽根田真弓 | 鳥取大学院生 |
| 3105 | 村上 仁崇 | 岩手大学院生 |
| 3106 | 平沢 博子 | 東京音楽大学附属高等学校 |
| 3107 | 豊村 雅義 | 福岡教育大学附属小学校 |
| 3108 | 尾形 景子 | 大阪成蹊短期大学 |
| 3109 | 正木 燈子 | 埼玉大学院生 |
| 3110 | 荒木 泰彦 | 金沢大学附属小学校 |
| 3111 | 星田 茂之 | 滋賀大学附属中学校 |
| 3112 | 安田 理奈 | Goldsmiths College Univ. 院生 |
| 3113 | 近藤 茂之 | 名古屋短期大学 |
| 3114 | 梅原 圭 | 常葉学園短期大学 |
| 3115 | 島本 和加 | 高知大学院生 |
| 3116 | 横井 志保 | 一宮女子短期大学 |

3117 山下 万紀
 3118 近藤 真子 Oakland University 院生
 3119 柳川 安代
 3120 今川 恵子 福岡教育大学院生
 3121 藤田 光子 別府大学短期大学部
 3122 瀬川久美子 甲南町立希望ヶ丘小学校
 3123 前津 元子 琉球大学院生
 3124 豊田 典子 大阪薫英女子短期大学
 3125 和田美亀雄 弘前大学
 3126 外谷 和弘 弘前大学院生
 3127 鶴岡 陽子 千葉大学院生
 3128 瀬尾 宗利 東横学園小学校
 3129 河瀬 里子 神戸大学院生
 3130 浅見 浩 愛知教育大学院生
 3131 河崎 秋彦 水戸市立新荘小学校
 3132 及川 節子 横浜市立間門小学校
 (32名)
 特別会員
 羅 在 璿 国立全南大学校芸術大学
 申し出退会者
 1970 岡井 節子 IPIF 日本支部センター
 1983 矢内 寛 洗足学園短期大学

1541 有木 香織 岡山大学
 700 田中 旬子 大阪成蹊短期大学
 694 藤岡 明子 宇部短期大学

(5名)

(平成15年7月20日現在 1647名)

6. その他

- 1) 実践ジャーナル投稿規定改定について
 - ・学会誌への投稿は入会后1年を経過しなければ発表できないが、実践ジャーナルにおいては入会時より投稿できるよう、次回の理事会に編集委員会より提案、規約改正を総会にかける。
- 2) プロジェクト研究の公募方法について
 - ・今後のプロジェクト研究の公募のあり方について、色々な意見が出された。
- 3) HP移転について
 - ・国立情報学研究所に登録、HPを移転することとする。

住所・所属変更及び新入会員住所 (2003年7月承認まで)

2000年度版No.10 7月31日現在

**ニュースレター web 版では
 個人情報に関する記事は削除しています**

全国の院生のみなさん， 神戸大会の《院生フォーラム》に参加して 「トク」をしませんか？

日本音楽教育学会第34回全国大会において、昨年に引き続き《院生フォーラム》を開催いたします。今回は【ポスター部門】と【院生交流部門】の二本立てで行います。院生の皆さんは、単位の取得や学費稼ぎのアルバイトなどに追われながら（また、仕事や家庭との両立に苦労しながら）、日夜研究に没頭されていることと思いますが、研究テーマに関連した資料や情報は思うように集められていますか？

限られた時間の中で研究成果を出さなければならないのですから、いろいろな方面からの助言や情報提供を期待したいところです。しかし、「私がこういったテーマで研究をしている」ということを、一体どれくらいの人知ってくれているのでしょうか。自分の研究テーマを広く知ってもらっていると、「あ、大学のさんが、このテーマで研究していたな。この資料について教えてあげよう」などと、思わぬところで「トク」をすることがあります。しかし、知られてなければそういったことはあり得ません。

学会などで発表をすれば、「どこそこの誰々がどのような研究をしている」ということは多くの人々の知るところとなりますが、ある程度まとまった成果が得られた段階にならないと、学会等外部で発表することはないのが通常です。

そこで、今回の【ポスター部門】では、「こんな研究をしています」「このテーマでこういう手法で研究を始める“つもり”です」「この研究において、こういう問題点にぶちあたって困っています。助けて！」など、「まとまっていない段階での発表」をしていただくことと企画しました。（もちろん「まとまった段階での発表」も大歓迎です！）そうすることによって、自分の研究テーマを広く知ってもらうこととなり、それに対する助言や情報提供などがより得られやすくなるのではないかと考えたからです。また、他学の院生のテーマを知ることも大いに参考になるのではないのでしょうか。

さらに【院生交流部門】では、「研究方法に関する疑問」「仕事と研究との両立」「家庭と研究との両立」「研究助成金を獲得するには・・・」「就職に対する不安」など、意見・情報の交換を行い、限られた時間やそれぞれが置かれた環境のなかで、院生が順調に研究を進めていくための方策を模索したいと考えています。

《院生フォーラム》での交流をとおして、院生相互の横のつながりをつくり、今後の研究生活に役立てませんか。ポスター部門は、発表者がポスターのところにおいて、解説をしていただくのが原則ですが、当日参加できない場合はポスターのみの参加でも結構です。なるべく多くの院生の皆さんに参加していただき、多くの方が「トク」をする《院生フォーラム》にしたいと考えています。難しく考えないで、とにかく・・・

「掲示物」を作って神戸に集合！（もしくは郵送）

日時：2003年10月19日（日）13:00～14:00（前半：ポスター部門、後半：院生交流部門）

場所：神戸大学発達科学部F棟2階ロビー

【ポスター部門】参加申し込み方法：下記まで電子メールでご連絡ください。追って詳細についてご連絡いたします。基本的に分量や様式などは自由です。（9月末日までをお願い致します）

申し込み先：岡部芳広 okabe@gol.com（神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程）

【院生交流部門】の事前参加申し込みは必要ありません。

《院生フォーラム》についてのサイトを、近日オープンする予定です。学会ホームページよりアクセスしてください。

担当：岡部芳広（神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程）

**** 編集後記 ****

ニュースレター13号のキーワードは「共有」です。日韓の音楽教育学会姉妹学会協定、今夏世界各地で行われた国際会議の報告、研究分野を異にする学会員からの「想い」等々を寄せていただきました。

さて、私の勤務する大学では今夏「キャンパス・セクハラ・ネットワーク全国集会」が開かれました。これをきっかけにある音楽大学のセクハラ問題の相談に関わっています。音楽教育界では、私淑する先生による長期間の個人レッスンの形態が大学教育にもそのまま持ち込まれることによって、他分野の視点では想像を絶するセクシュアル/アカデミック/ジェンダー・ハラスメントが横行しています。教員はその世界で育ってきているので、慣れっこになり感覚が麻痺している部分があります。教える側の意識の涵養と教育機関の体制たてなおし、悩みを抱える学生のためのネットワークの設立の必要を痛感しています。この3つは、音楽教育の振興と研究の発展のための基盤ではないでしょうか。（奥 忍）

以前からアメリカの音楽雑誌の広告に出ていた Xaphoon（ザフーン）という楽器が気になっていたのですが、先月とうとうそれを買ってしまいました。といっても、9つのトーンホールをもつ30cmほどのプラスチック管にテナーサクソフォンのリードを付けて吹くだけの簡単な構造の楽器です。音域は2オクターブしか出ませんが、「ポケットサククス」と称するだけあって、ピッチベンドやヴィブラートを駆使して吹けばそれなりに遊べます。楽器ほど楽しいおもちゃはない、とあらためて思う夏の日でした。（北山敦康）

【日本音楽教育学会役員（2002-2004年度）】

会長：村尾忠廣 副会長：平井建二・坪能由紀子

常任理事：筒石賢昭（事務局長）、奥忍・藤沢章彦・北山敦康（総務）、加藤富美子・島崎篤子・丸山忠璋（企画）重嶋博・杉江淑子（会計）

理事：浅井良之（北海道）、丸林実千代（東北）、伊藤誠・今川恭子・

小山真紀・阪井恵・山本文茂（関東）、伊野義博（北陸）、南曜子（東海）、

中原昭哉・竹内俊一（近畿）、野波健彦・吉富功修（中国）、

田邊隆（四国）、木村次宏（九州）

【事務局住所】 184-0015 東京都小金井市貫井北町 2-5-22 ハイツシーダ 1-102

【私 書 箱】 184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://www.remus.dti.ne.jp/onkyoiku/index.html>